

令和 7（2025）年度

学校推薦型選抜（人間健康科学部 福祉学科）試験問題

小論文

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないでください。
- 2 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 3 解答には鉛筆かシャープペンシルを使用してください。
- 4 問題は全部で8ページ、解答用紙は全部で2枚あります。
- 5 試験時間は90分です。
- 6 試験終了後、問題冊子も回収します。
- 7 何か伝えたいことがあるときは挙手してください。

第1問

問題文1を読んで設問1と設問2に、問題文2を読んで設問3にそれぞれ答えなさい。

問題文1

我々は、何か困ったことがあれば、いくつかの解決策を考えます。「Aの方法」「Bの方法」「C」「D」「E」……といくつか選択肢を考え、どの方法がいいか吟味し、選択して、実行し解決を目指します。上手くいかなければ他の選択肢を選び直し、再度実行していきます。ここで重要になってくるのは解決案のバリエーションの豊富さと、状況に応じて適切に選択肢を決める“融通を利かせる”力です。頭の柔らかさと言いかえてもいいかも知れません。

例えば、“お金が必要であるがお金がない”といった困った状況にあるとします。それに対して、A：アルバイトをする、B：親族から借りる、C：宝くじを買う、D：強盗する、といった解決案が出るとします。Dという案を選べばその後どうなるかを考えると、通常でしたら選ばないでしょう。もっと他の解決策がひらめくかもしれません。

しかし頭が硬い、つまり融通が利かず、Dの解決案しか出てこなければどうなるでしょうか？お金がなくなる度に強盗を繰り返すことになります。これが不適切な行動を繰り返してしまう頭の硬さなのです。

私が非行少年たちの融通の利かなさに気づいたのは、面接の中で「日本版BAD S（遂行機能障害症候群の行動評価）」という神経心理学検査を少年たちにしたときでした。

BAD Sはもともと、高次脳機能障害などの脳損傷患者の遂行機能を評価する方法として開発されたものです。遂行機能は実行機能とも呼ばれ、日常生活で問題が生じた際に、それを解決するために計画を立て、効果的に実行する能力です。ちょうど先ほどの“お金が必要であるがお金がない”といった場合にどうするかというケースと同じです。

概して高次脳機能障害ではIQは高いままなのですが、計画を立てて実行することなどができなくなります。IQは問題がないので周囲になかなか理解されず、日常生活でさまざまな困難が生じますが、BAD Sを使うとその困難の程度がよく分かります。BAD Sはそれを机上の検査で評価できるのです。

私はこのBAD Sを少年院に入ってきた非行少年たち皆に行いました。どうしてBAD Sを少年たちにしようと思ったのかと言うと、少年たちの中にはIQは高いのにどうも要領の悪い少年や、逆にIQは低いのに要領よくて賢いと思わせられた少年が何人もいたからです。IQはWISC（ウィスク）やWAIS（ウェイス）といった知能検査を行って測るのですが、それらIQ検査では彼らの

真の賢さを適切に評価できていないことに気づいたのです。第6章でも紹介しますが、現在の知能検査だけでは彼らの能力や生きる力を正しく評価できないのです。

BADSの検査の中に「行為計画検査」というものがあります。透明な細長い円筒の中にコルクが入っています。その隣には真ん中に小さな穴が開いた蓋が被さった水の入ったビーカーが置いてあります。そして手元には先の折れ曲がった針金、透明の円筒状の筒と蓋が置かれています（図1）。ルールは、手元の針金と透明の円筒状の筒と蓋の3つだけを使って、コルクを取り出すこと。但しコルクの入った筒や、ビーカーは手で触ってはいけません。

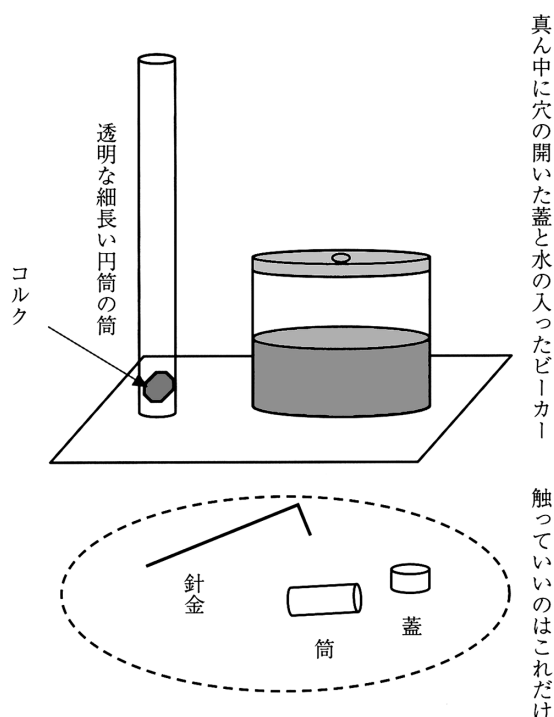
この問題に対する答えは以下の通りです。まず、透明の円筒状の筒と蓋でコップを作ります。次に先の曲がった針金でビーカーの蓋をあけ、コップを使って水を汲みます。そしてその水をコルクの入った筒に入れてコルクを浮かせて取る、という手順です。何手か先まで考えて計画を立てないと解けない課題ですが、健全な少年であれば通常はすぐにできます。

しかし融通が利かない非行少年たちはどうするかというと、いきなり針金でコルクの入った長い筒をつつき、コルクを取ろうとします。しかし針金が短いのでコルクには届きません。無理と分かってもひたすら続けたり、コップを作る筒や蓋でコルクの入った長い筒をペタペタ叩いたりして、制限時間が過ぎてしまいます。横に置いてある水の入ったビーカーには目を向けないのです。「どうしてこんなところに水があるのだろう」といった疑問すら湧きません。目の前のコルクにしか目が向かず、水を使うといった解決策が出てこないのです。とても頭が硬いと感じました。これでは、悪友に悪いことを誘われたら躊躇なくやってしまう訳です。

学校でも融通が利かず頭の硬い子がいます。そういった子はやはり解決策が一つかよくて二つしか出てきません。一つしか出てこない、それが最適な解決案かどうか分かりませんし、また過去に同じ失敗をしていても何度も同じ間違いをしてしまうのです。こうした態度は、日常生活では、次のようなことにもつながります。

・思いつきでやることが多い⇒一旦考えることをせずに直ぐに行動に移してしまう。気づきが少ない。
見たものにすぐに飛びつく。騙されやすい。過去から学べず同じ間違いを繰り返してしまう。

図1



・一つのことに没頭すると周りが見えなくなる⇒やる前から絶対こうだと思って突き進む。思い込みが強い。一部にしか注意を向けられず、様々なヒントがあっても注意を向けられない、見落としてしまう。

(中略)

このような子どもたちは、何らかの問題に対して、直ぐに答えを出してしまいます。時間をかけて“ちょっと待てよ。ほかに方法はないかな”といった柔軟な思考や違った視点を持つことがとても苦手なのです。これらは対人関係においても様々なトラブルに結び付いてしまいます。

少年院の少年たちにとくに感じたことの一つに、「変に被害感が強い」ということがあります。少年院では毎日の日課が細かく決まっていて、日課に集団で向かう際に少年たちがすれ違うことが多いのですが、すれ違う際に少し目があっただけで“あいつがにらんできた”、肩が触れてきただけで“ワザとやりやがった”、舌打ちされると“自分に向かってやってきた”、周りでヒソヒソ話をしていると“自分の悪口を言っている”といった訴えが実に多いのです。

本当なのかもしれませんが、一方で、“ひょっとして自分の勘違いじゃないか？”“気のせいじゃないか？”“ワザとじゃないのでは？”といった考えが全く出てこないのです。“絶対そうだ”と思い込んで修正が利かない、思考が硬い子がとても多いのです。こうしたささいな出来事に対する思い込みが積み続けていくとどんどんと被害感が強まり、何かの拍子にいきなり少年どうしで殴り合いになる、というような事態が起こります。これも融通の利かなさ、思考の硬さが原因となっているのです。

問題文2

犯罪を行った少年は通常、少年院に約1年間在院します。入ってきた時は、態度が大きい、妙に馴れ馴れしい、妙に素直、非行を他人事のように答える、少年院送致に不服で被害者に逆ギレしている、など様々な問題を露呈している少年がほとんどです。

そんな中、だいたい入院後8ヶ月頃から大きく変わり始める少年たちがいます。彼らは「少年鑑別所や少年院に入ったときは、反省しているように見せていたけれど、今は違う。本気で変わるのはいましかないと思った」と述べ、犯罪を行った頃の自分がいかに馬鹿なことを思っていたり、言ったりしていたかを客観的に分析できるようになるのです。

(中略)

人が自分の不適切なところを何とかしたいと考えるときは、「適切な自己評価」がスタートとなります。行動変容には、まず悪いことをしてしまう現実の自分に気づくこと、そして自己洞察や葛藤を

もつことが必要です。適切な自己評価ができるからこそ“悪いことをする自分”に気づき、“また悪いことをやってしまった。自分ってなんて駄目な奴なんだろう”“いつまでもこんなことをしてられない。もっといい人になりたい”などといった自己洞察・自己内省が行えるのです。そして、理想と現実の間で揺れ動きながらも、自分の中に「正しい規範」を作り、それを参照しながら“今度から頑張ろう”と努力し、理想の自分に近づいていくのです。そのためにはやはり、自己を適切に評価できる力、つまり“自分はどんな人間なのか”を理解できることが大前提なのです。

少年院では集団生活を強いられます。教育ではとことん自分に注意が向けられます。これまで好き勝手に生きてきて、自分を顧みず、何かあっても他人のせいにしていた彼らが、自分はこれまでどう生きてきたか、どれだけ皆に迷惑をかけてきたか、支えられてきたかを、振り返られます。

(中略)

自分が変わるための動機づけには、自分に注意を向け、見つめ直すことが必要です。先に挙げた少年たちが変わろうと思ったきっかけに共通しているのも、これまで社会で失敗し続けて自信をなくしてきた彼らが、集団生活の様々な人との関係性の中で、“自己への気づきがあること”そして様々な体験や教育を受ける中で、“自己評価が向上すること”の二つなのです。特に自己への気づきについては、押しつけでなく少年自身が自ら「気づきのスイッチ」を入れねばなりませんので、我々としては少しでも多くの、かつ様々な気づきの可能性のある場を提供し、スイッチを入れる機会に触れさせることが大切です。

(中略)

少年院には自己評価の低い少年たちが沢山います。彼らは何をやるにしても否定的で、「どうせやっても無駄」と言って、最初から何もやろうとしません。学校の勉強で何度も挫折して、すっかりやる気をなくしているのです。私が少年院で各種のトレーニングを始めた頃も、全くやる気のない少年たちが何人かいました。もちろん勉強が苦手で認知機能も弱い少年たちでしたので、認知機能向上を目指したトレーニングのグループに入れて、トレーニングしてみることにしたのです。

当初、私が前に出て、少年たちに指導していたのですが、このやり方はなかなかうまくいきませんでした。

(中略)

もともと勉強嫌いで学校での授業など真面目に聞いたことのない少年たちですから、私も「やはり駄目なのだ」と思いました。そして私はだんだんと指導するのが嫌になり、投げやりになりました。とうとう私は、教えたり問題を出したりするのを止め、文句を言っていた少年たちに「では替わりにやってくれ」と彼らを前に出させ、私は少年側の席に移りました。彼らに私の苦勞を体験させようと思ったのです。

ところが、そこで驚くことが起きました。私を無視していた少年たちが「ボクにやらせて下さい」「ボクが教えます」と先を争って前に出てきたのです。そして、とても楽しそうに皆に問題を出したり、得意そうに他の少年に答えを教えたりし始めたのです。

(中略)

そうすると皆の力もどんどん伸びていきます。それで気づきました。少年たちに“教えるんだ”という視点では駄目なのだ、と。これまで幾度となく“こんなのも分からないの?”と言われ馬鹿にされ続けてきた少年たちは、自分たちも、“人に教えてみたい”“人から頼りにされたい”“人から認められたい”という気持ちを強くもっていることを知りました。そしてそれが自己評価の向上に繋がっていくのです。

出典：宮口幸治（2019）『ケーキの切れない非行少年たち』新潮社、一部改変

※注 「少年院」は家庭裁判所から保護処分として送致された非行少年を収容し、社会復帰を目指して更生のための専門的な教育（生活指導、教科指導、職業指導など）を行う国の施設である。

設問 1

問題文 1 について、作者は日本版 BADS の行為計画検査から非行少年たちの心理特性についてどのように理解しているか、この検査の意義に触れて 200 字以内で説明しなさい。

設問 2

問題文 1 について、作者は少年院の少年たちが変に被害感が強いと述べています。非行少年たちのこうした特徴と「融通の利かない」こととの関係を作者はどのようにとらえているか、200 字以内で説明しなさい。

設問 3

問題文 1 にある非行少年の心理特性を理解したうえで、問題文 2 を踏まえて少年院で彼らを指導・関わりをする場合の要点についてどのように考えるか、500 字以内で説明しなさい。

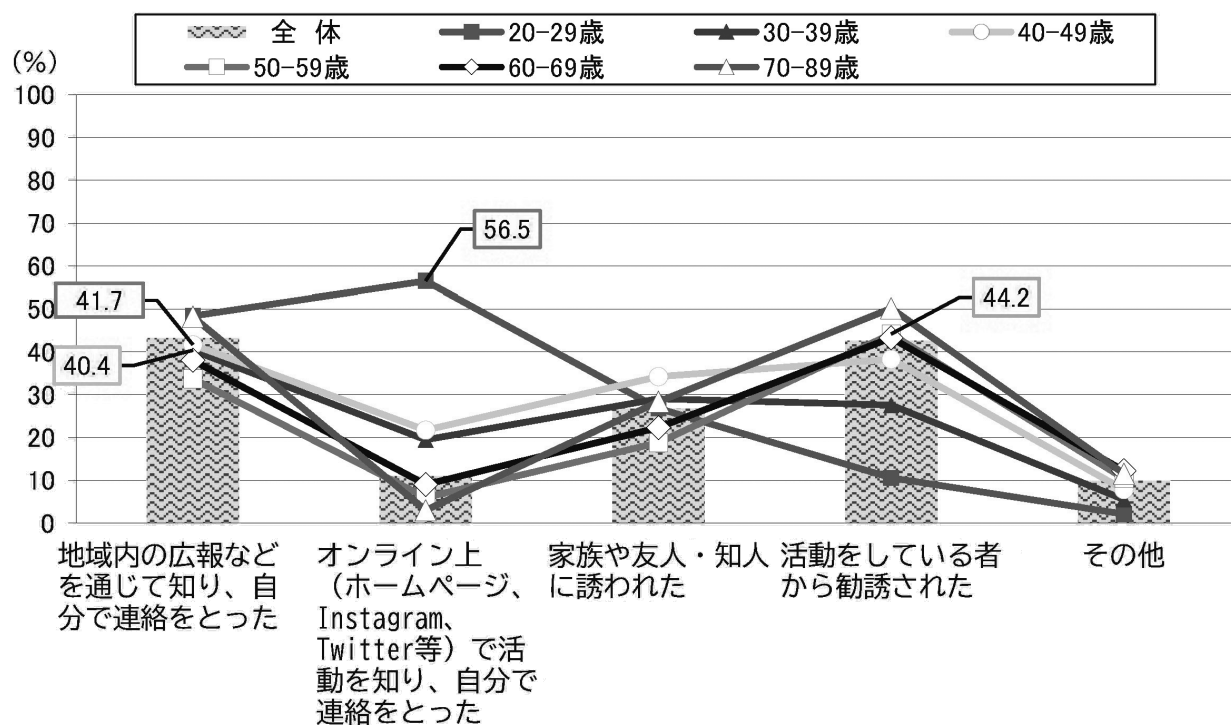
第2問

図1～4は社会参加活動について調査した結果を示したものである。これらを参照しながら設問に答えなさい。

設問1 図1は「社会参加活動を始めたきっかけ（方法）」についての調査結果を示したものである。

図1から、20代と70歳以降を比較して言えることを200字内で説明しなさい。

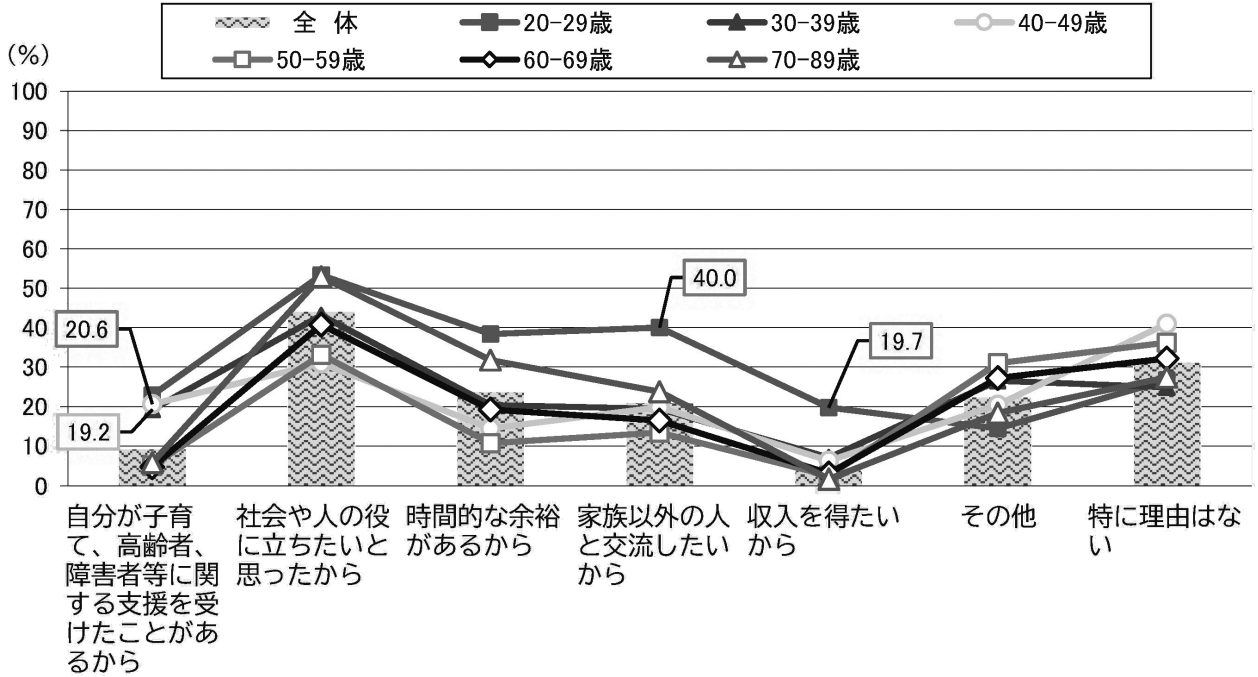
図1 社会参加活動を始めたきっかけ（方法）



資料：厚生労働省「令和4年度少子高齢社会等調査検討事業」

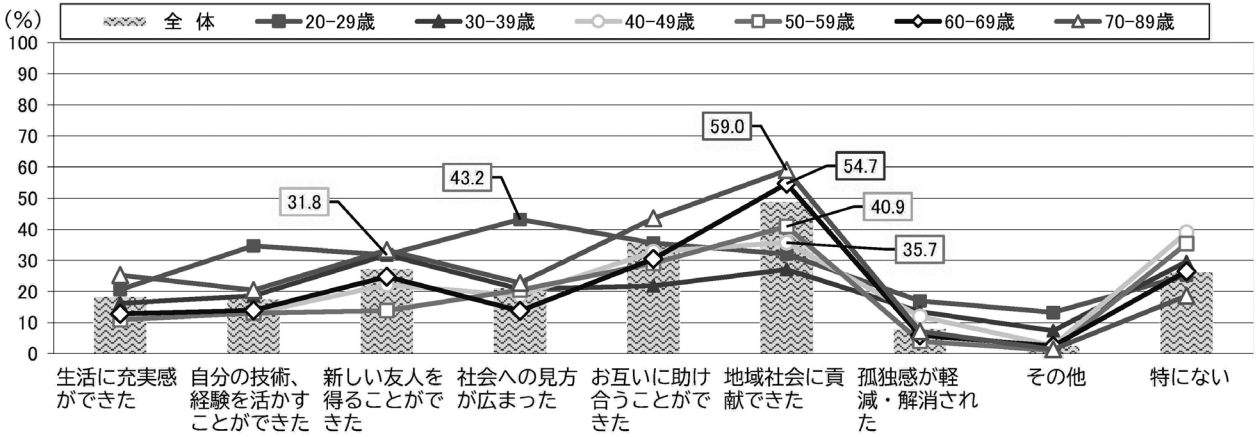
設問2 図2は「社会参加活動を始めた理由」について、図3は「社会参加活動をしていて良かったこと」について調査した結果を示したものである。図2と図3から20代の社会参加活動に対する特徴を200字以内で説明しなさい。

図2 社会参加活動を始めた理由



資料：厚生労働省「令和4年度少子高齢社会等調査検討事業」

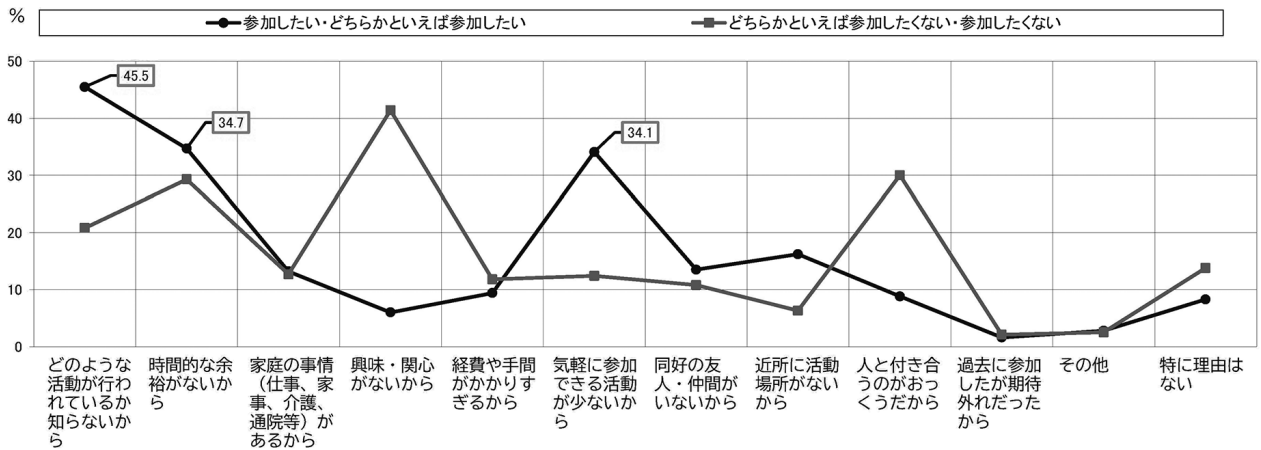
図3 社会参加活動をしていて良かったこと



資料：厚生労働省「令和4年度少子高齢社会等調査検討事業」

設問3 図4は、社会参加活動に「参加したい・どちらかといえば参加したい」と思っている者と、「どちらかといえば参加したくない・参加したくない」と思っている者が、現在、社会参加活動をしていない理由について、全世代の結果をまとめて示したものである。図1～4全ての結果を踏まえて、20代にとって社会参加活動を進めるために有効だと思う施策について、あなたの考えを400字以内で述べなさい。

図4 社会参加活動をししない主な理由



資料：厚生労働省「令和4年度少子高齢社会等調査検討事業」

出典：「令和5年版厚生労働白書（令和4年度厚生労働行政年次報告）－つながり・支え合いのある地域共生社会－」（厚生労働省）

(URL： <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/22/dl/zentai.pdf>)